



僕たちが住みたい「みなとまち」をつくる

—あいだをつなぐみなと SASEBO RE PORT—



Profile



一般社団法人REPORT SASEBO 代表理事
佐世保市役所 企画部文化振興課 主査

なか お ひろ き
中尾 大樹

1983年 長崎県佐世保市生まれ
2002年 青山学院大学文学部心理学科入学
2006年 佐世保にUターン、佐世保市役所入庁
2008年 自主研究グループ「交点」スタート
2015年 妻とカフェ「RE PORT」オープン
2018年 エリアマネジメント「万津6区」立ち上げ
2019年 各プロジェクトを統合、
一般社団法人REPORT SASEBO設立
2021年 ホテルプロジェクト「RE SORT」スタート

REPORT(リポート)の 中尾と申します。

今回、僕の住む佐世保や、このまちで仲間と取り組んでいるプロジェクトに光を当ててくださり光栄です！10年続けてきてよかった。これまでと、これからの活動のこと。悩み、考え、行動してきたことがうまくお伝えできるよう、写真や画像を交えながらがんばって書きます。

僕は現在、佐世保市役所で公務員として働きつつ、「RE PORT」という事業に取り組んでいます。現在の事業の柱は、佐世保港にほど近い万津町というまちで営むカフェ(RE

PORT)で、この場所を起点に、イベント企画のほか、商品開発やデザイン、小さなエリア単位のまちづくりの支援など、佐世保の価値を「リポート」して可視化していくことをミッションとして活動を行っています。

【画像1】カフェ・REPORT

毎年なにかしらの事件が起こりますが(現在はコロナ)、なんとかもうすぐで丸6年を迎えるカフェで、僕らの活動拠点。海をイメージしたブルー、山をイメージしたグリーンの街をイメージしたグレーの3色をキーカラーとしたこの場所も、僕たちの考える佐世保らしい



画像
1



空間を目に見える形にしてみようというひとつのチャレンジ。シフォンケーキが人気で、不定期でイベントも開催中。

画像
2



【画像2】REPORTがある 万津町(万津6区)

「三ヶ町、四ヶ町、五番街と続く佐世保のまちの端っこ、海のそばにある万津町。夜明け前、朝市に集う人々、小さな商いははじめた若者たち。道ばたを歩く猫と、旅人を運ぶ汽笛の音。かつて交通の要所としてにぎわったこの場所で、今再び、心地よい出会いの風景が生まれはじめています。懐かしさと新しさが交差する6つめのまち。それが万津6区です。」とみなさんにご紹介している小さなみなとまち。

画像
3



【画像3】REPORTのロゴ

海・島・船をイメージして作ってもらったREPORTのロゴ。『僕たちの暮らす佐世保ぐるりのよい！と感
じる生活を自ら実践したり、実践している人や
ものごとをリ

これらの活動は、現在、2019年7月1日（佐世保の開港記念日）に法人化した「一般社団法人REPORT SASEBO」にて、これまで出会ったすこし変わった仲間たちと取り組んでいます。役員6名、クルー11名と事業規模の割に割と大所帯。役員は公務員のほか、グラフィックデザイナー、景観・まちづくりプランナー、観光アドバイザー、ホテルディベロッパーと別に本業を持ち、基本的に無報酬（変でしょ）。クルーも主婦や学生、アート作家など、もう一つの顔があつて、それが僕らのチームの特徴といえるかも知れません。

画像
4



【画像4】役員（の一部）

住まいもバラバラで、なかなか全員集合できませんが、活動が続ける中で、偶然（必然!?）出会った仲間たち。『新しく、このまちらしく、人間らしい』ことをつくる『を合言葉に、今このまちにはないけど、実はこのまちならではの、自分たちが心から生き生きとしていられる場所、そしてその場が続いていく仕組み（しごと）をつくっていくことを実践中。』



佐世保を象徴する

二つの海（みなとまち）を 舞台にしたまちづくり

また、近ごろは、有史以前から、佐世保を代表する景勝地である「十九島」を抱く俵ヶ浦半島や、軍港設置以降、近代佐世保の象徴となった「佐世保港」の玄関口、万津町のエリアマネジメント（という和大仰ですが、おせっかい焼きの活動）に楽しみながら関わらせてもらっています。俵ヶ浦半島では、行政支援のもと住民総出で作った将来計画の実行段階におけるお手伝い（地域がいかに経済と付き合っていくのか、がテーマ）、万津町では、自治会と商業者が一体となったまちのブランディング（経済がいかに地域と向き合っていくのか、がテーマ）に携わっています。どちらも顔の見える人たちと二人三脚で取り組む、三歩進んで二歩下がるような気の長い……よく言えば一生をかけたライフワークとなりそうです。

【画像5】 九十九島

空気が澄みきる2月が一番美しいと、誰かが言っていた海。が、至近距離で観察すると思いのほかワイルドな自然景観。



九十九島

画像 5



ワイルドな佐世保

【画像6】 佐世保港

山と海に隠されたような、と、誰かが言っていた港。と、そこに立ち現れるギャップを孕んだインダストリアルな都市景観。



佐世保港

画像 6



インダストリアルな佐世保

【画像7】 俵ヶ浦半島での取り組み

九十九島を臨む半島で、半農半漁の生活、生業に根差した美しい風景を守るために、地域がビジネスに取り組んでいくプロジェクトのお手伝い。地元産品を活用した商品開発（ハーププロジェクトほか）や、地元を内外にPRする取り組み（東京と佐世保MTG、菜の花・コスモスウォークの企画など）を支援しながら、僕らも一緒に学びを重ねています。

画像 7



俵ヶ浦「東京と佐世保MTG」



自分たちでペイント作業



自治会と行うマーケット餅つき

〔画像8〕万津町(万津6区)での取り組み

市中心部にありながら、新旧の要素が混在する小さなエリアにおけるまちづくりの取り組み。自治会のみなさんは、住みながらこのまちで小商いをされてきた方も多く、若者のチャレンジにもおおらか。まちの持つD-I-Yなムードや、離島航路を持ち、物流の拠点であった古い倉庫街のイメージを踏まえたロゴ・ビジュアル制作、住民と一緒にあったイベントづくりを企画、実施しています。

個人的に、佐世保を佐世保たらしめているこの対照的な2つの海こそが佐世保の二大ルーツであると感じていて、一ファンとして、まがりなりにも事業という形で、その海のそばに位置する2つのみなとまちに関われることは存外の喜びです。

ちよつと脱線するようですが、僕が心惹かれる佐世保の面白さは、このように落差のある2つのもの(例えば、都市と自然、軍港と商港、日本人とアメリカ人、理想と現実…といった)の物理的近接と、その結果として

の共存が醸し出す、ある種のねじれ、モヤモヤ、屈託、をまるっと受け入れ、やさしく、たくましく生きる人たちにあって考えています。

市職員(A面)として、REPORT代表(B面)として

これらの活動の前提、ベースとして、佐世保市職員としての仕事があります。もともと僕は、佐世保にUターンで帰ってくるまで、佐世保のことをほとんど知らないし、割にあまり好きではないという食わず嫌い状態。戻ってきたのもたまたま佐世保市役所だけが拾ってくれたからで、そもそも公務員という職を選んだのも安定とプライベートを充実させるため、というネガティブな選択。

そんな中、まちなかに住み、徒歩生活圏の中で、入り組んだ坂道やSSK、米軍基地などコンパクトで男前な街並みを新鮮に感じ始めていた矢先、地域にデザインや編集を取

り入れた面白い事例や取り組みと出会います。特に影響を受けたのは、当時注目を集めはじめていた波佐見・西の原エリア、そして、北九州市が発行していた「雲のうえ」というフリーペーパーでした。いずれも地域を再編集し新たな価値を与える新しい取り組みで、それぞれ話を聞かせてもらったり、内外の様々なコミュニティに出入りさせてもらい刺激を受けました。自分自身、市役所の仕事を通じて、故郷・佐世保をもっと面白くできるのではないかと考えるきっかけにもなり、自己研鑽も兼ねて、佐世保の可能性を学びなおすイベント等の活動(自主研究グループ「交点」を友人とスタートさせることとなります)。

〔画像9〕自主研究グループ

「交点」の活動

自主研究グループ「交点」では、佐世保にゆかりのある面白い大人をお招きし、話を聞き、お酒を囲んで語り合うというイベント「リポー



画像
9



レポートサロン



佐世保レトログラフィ

トサロン」や、写真が趣味の市外の若者をターゲットにした観光プログラム「佐世保レトログラフィ」の企画などの活動を行っていました。

そうこうしているうちに、最初に

配属された窓口から企画部門に異動し、プライベートで関わっていた中心市街地や倭ヶ浦半島の活性化の動きにも仕事として関わることになりました。市役所内外に、たくさんの方の熱い先輩、同志との出会いもあり、夜を徹してのまちづくり議論や計画づくりに、とてもやりがいを感じましたし、市全体の中での大きなプロジェクトにも関わらせてもらうなど働きながらたくさんの方の経験をさせていただきました。一方、自らのリスクでまちのプレイヤーとして活動している方々とは、行政の担当職員としては踏み込めない一線があることも同時に感じていました。また、当時公私ともに忙しく、プライベートで行っていた交点の活動が途切れがちになることにもジレンマを感じていました。

さらに、当時訪れた米国ポートランドにおける小商いを中心とした個人ベースの自由で風通しのよいまちづくりのあり方にも感動し、自らも事業としてまちづくりを行ってみた

気持ちを抑えきれなくなっていました。そこで、「家を買うくらいなら、店を買おう」と妻を説得、妻の個人事業（僕は連帯保証人）として、カフェをオープンしました。

正直、最初の2年間は、あまり記憶がありません。商売、お金を借りること、人を雇うこと、自分の責任のもとプロジェクトを立ち上げること、平行して市役所の仕事を行うこと、これまでの人生で経験したことのないストレスに苦しみました。ふがいないリーダーのもと、現場に立ち、支えてくれた妻や仲間には感謝しかありません。そういった意味で、民間の（特に個人で商売をされている）方へのリスクは増すばかりでしたし、同時に行政の立場でしかないこともたくさんあることに気づかされました。

その後、様々な人に助けられ、なんとかカフェ事業は安定し、市役所も活動の趣旨を理解してくれたことから、仲間たちと法人を立ち上げることにしました。市の仕事、カフェの経営を通じ、公と民、中の人と外の人、



にぎわうかつての朝市（万津町）

高齢者と若者、雇う人と雇われる人：様々な立場や人の間を行き来する中で、それらのものを結びつけられるような事業や場づくりに取り組めたらいいな、と感じたためです。10年がかりでようやく自分のやりたかったことのスタートラインに立てたと、今なら冷静に振り返ることができそうですし、後悔はありませんが、もし、人生やり直せるとして、もう一回やるかと聞かれれば…かなりアヤシいです（笑）。



僕らの住みたい

「みなとまち」をつくる

まちごとホテル

「RESORT」プロジェクト

なんとか生き延びた僕たちの船ですが、法人化を経て新たな挑戦を行うことになりました。これから、佐世保の2つのみなとまちはもつと面白くなるはず。ぜひ見守っていただきたい、応援していただきたいプロジェクトを最後にご紹介させていただきます。

それは、佐世保全体をホテルと見立て、当たり前の暮らしやまちの資源を組み合わせて「リゾート」に変えていく、というプロジェクト。RESORT“です。その第1弾として、万津6区にある古いマンションの空き部屋をリノベーションした限定3室の部屋が9月にプレオープンしました。眼下に佐世保港と米軍基地を臨む全室+屋上サウナ付きのマイクロホテルです。海山に囲まれた佐世保らしさにこだわった立地・物件・内装・アート・風景と、全国的にもま

だめずらしい「I-Tによる無人運用」、「仲間と楽しめるプライベートサウナ」を掛け合わせた結果、ほかのどこにもない突き抜けた客室ができたのではないかと思います。

今後、車やヨットを客室と見立てた「移動する部屋」、併せて、このまちで生活する人たちと交流できる新たな公民館・図書館機能を備えた「まちのラウンジ」などを複数箇所に導入していく計画です。また、万津6区の仲間が、オリジナルのクラフトビールや、ものづくりのラボラトリーを作る企画も平行して進んでいます。

これらのプロジェクトは、これまで佐世保になかった新しい取り組み：というか、タイミングも含めまともな事業者はそもそも手を出さない、ある意味バカな企画だと思っています。しかし、コロナを含む様々な閉塞感に対し、自ら楽しみながら、ちょっとおかしいアイデアを実際に形にしてくことで、まちのムードを変えられたら、そこで得た経験を失敗も含めまことに還元していけたら、と考えチャレ

ンジすることになりました。

僕たちの目指す「みなとまち」は、年齢、性別、人種、職業といった立場を越えて、このまちに関わる誰もが尊重され、フラットな関係を結べる出会いと発見のあるまちです。少なくとも僕たちはそんなまちで生きていきたい。それには、先人たちが積み上げてきた豊かさの上に、今を生きている僕たちがこのまちの文脈に合った新しい挑戦を重ねていくこと、新しい場

を作っていくことが必要だと強く思います。これからこのまちを楽しみ尽くすことで、少しでもまちに恩返しができたらいいな、と願いつつ、現時点の僕たちRESORTのリポートとさせていただきます。

最後まで読んでくださったあなたと、万津6区で、俵ヶ浦半島で、佐世保のどこかで、出会い、語り合えることを心から楽しみにしています！



先行開業したホテル



RESORT 公式ホームページ
<https://www.resortsasebo.com/>





一般社団法人 離島振興地方創生協会の活動支援

十八親和銀行 地域振興部

日本はおよそ7,000の島からなる国で、そこに豊かな自然と食の恵みがあります。そこに住む生産者の方々は、何代にも亘り、この土地で食文化を育んできました。しかし、少子高齢化、人口減少の問題は地方や離島地域の生活基盤を刻々と奪いつつあります。そのような中、離島地域の1次産業の振興を目的に「一般社団法人離島振興地方創生協会」(以下、「離創協」。)が2020年4月に設立されました(ホームページ <https://risokyo.or.jp/>)。

離創協の理事長には中村法道長崎県知事の依頼により、千野和利氏が就任されました。千野氏は、大阪でスーパーマーケットを経営する株式会社阪急オアシスの代表取締役や、一般社団法人全国スーパーマーケット協会の副会長などを歴任され、都市部の食品関連事業者に精通されている方です。

離創協では、長崎県の「対馬市、杵岐市、五島市、新上五島町」の4地域をフィールドとし、次の3点を重点

政策として活動しています。

① バリューチェーンの構築

全国のスーパーマーケット・百貨店・専門店や会員企業と連携し、離島事業者の販路拡大や、海外展開を支援。

② 生産基盤の整備

離島の人口減少を要因とする耕作放棄地が拡大する中で、将来にわたって安定的な生産基盤を、新しい発想で構築。

③ 生活基盤の整備

離島の情報インフラや再生可能エネルギーの活用など、まちづくりの視点に立って、暮らしの基盤整備を実施。

離創協の活動を長崎県、対馬市、杵岐市、五島市、新上五島町の各自自治体が支援をする他、正会員71社、賛助会員63社の計134社(2021年3月時点)の全国各地の企業が支援しています。十八親和銀行でも、地域活性化のために様々な事業・プロジェ





クトに携わっていますが、同じベクト

ルで進む離創協の活動に共感し、
2020年より離創協の正会員と
して加盟しました。

当行では、離創協からの依頼を受
け、次の支援を行っています。

① 離創協への人材派遣

離創協の活動を支援するため、
離創協へ1名人材を派遣し、協会活

動を支援。

② 離島事業者の育成

離島の若手事業者の育成を目的
に、対馬、壱岐、五島、上五島の4地
域で「オピニオンリーダー講習会」を
月に一度、離創協と共同で開催。

③ 各離島の産品を離創協に紹介

離創協に対し、各離島の産品を紹
介し、幅広い事業者を支援。

④ 離島への企業誘致

九州を拠点とする企業の工場・
施設の一部を離島に誘致。

⑤ 協会活動支援事業者の拡大

長崎県内及び九州エリアの事業者
に協会会員（正会員・賛助会員）への
加盟を依頼。

当行は、離創協と共に離島地域の
活性化のため、これからも積極的に
活動して参ります。本事業に関する
ご質問、ご相談については、下記連絡
先までお願いいたします。



【連絡先】

十八親和銀行 地域振興部

担当: 古瀬(ふるせ)

TEL 095-827-8609(直通)

Mail s-furuse@18shinwabank.co.jp